

## I 自然環境 Natural environment

慶応義塾、藤沢キャンパス予定地は、藤沢市の北西部に位置し、東京から約45kmの距離で茅ヶ崎市北東部に隣接している。この地域の植生では、気候、地形、地質、土壌などの自然環境により自然植生が生育を異にしているが、さらに人為的影響により様々な代償植生が発達し複雑な植生分布を示している。

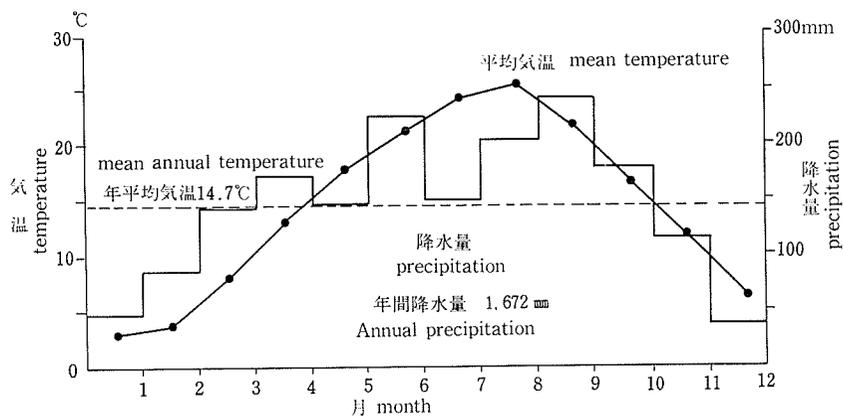
### 1. 気候 Climate

藤沢キャンパス予定地は相模湾の中央に位置する藤沢市北西部を占める。藤沢市南部は湘南型の海洋性気候を示しているが、北部は丹沢、大山山塊の気候的影響を受ける内陸型気候に含まれ、年平均気温14.7℃、最寒月2月の最低気温は-7℃、平均気温は3.9℃で常緑広葉樹林の生育可能な気候を示している。降水量は、年間降水量1,672mmで沿岸部の1,750mm以上の地域よりやや少ない程度である。

### 2. 地形・土壌・地質 Topography, soil and geology

藤沢キャンパス予定地域は、関東ローンを主とした台地地域で、相模台地の南部に位置している。標高18~39mで、北東部より南部を流れる小出川とその支流の沖積低地が谷地を形成している。小出川は南部を東西に流れ茅ヶ崎市西部を通り相模川に流入している。

相模台地の南部には、沖積低地部と、平坦にならされた古湘南砂丘が続き、現在の湘南砂丘を経て相模湾に接する。相模台地南側の沖積地は境川、引地川による沖積地で、湘南砂丘地帯も含



出典：気象庁海老名観測所

Fig. 3. 気温及び降水量

Temperature and precipitation data at Ebina climate observatory from 1977 to 1986

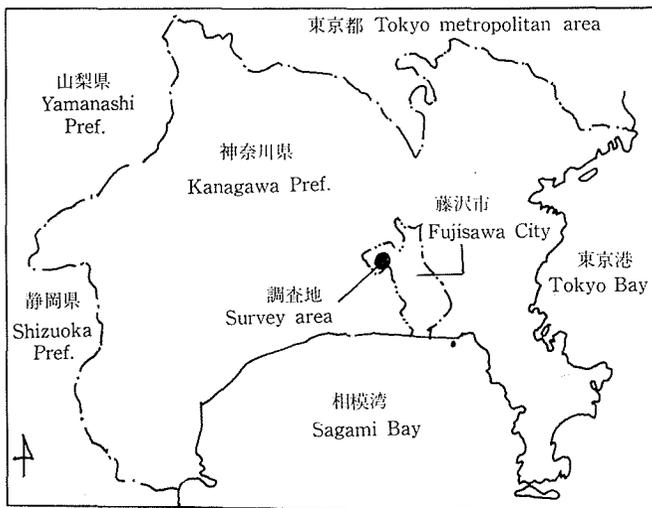
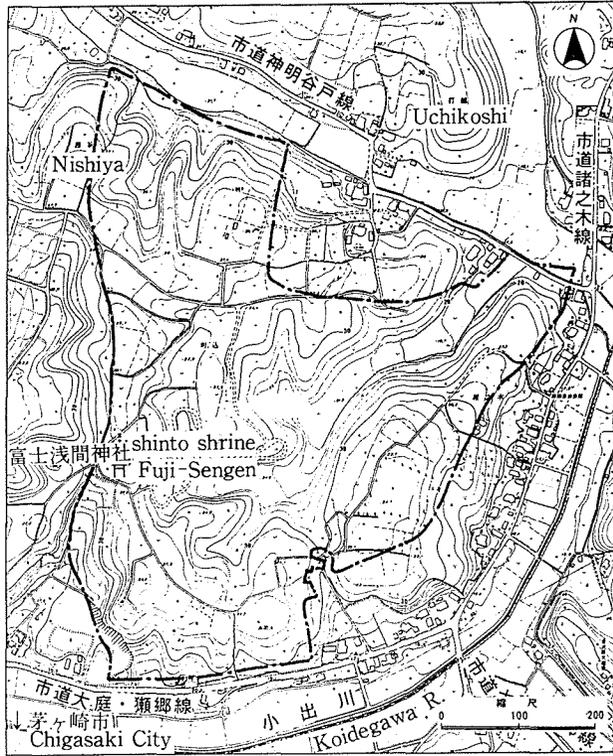
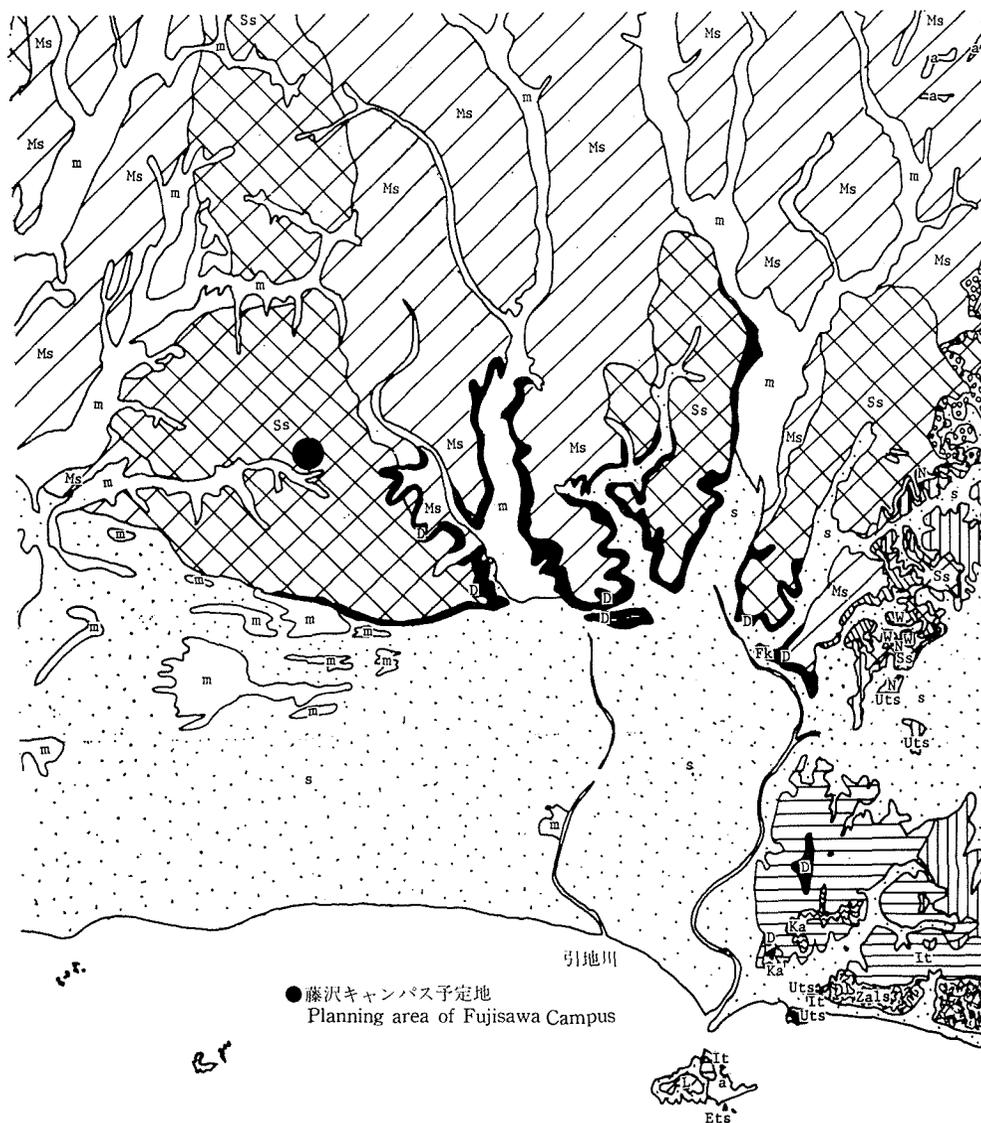


Fig. 4. 調査地域および調査地点  
Area and location of field survey



- 凡例 Legend
- 第4紀 Quaternary
- 沖積層 Alluvial deposits
- m=主として泥 Mud
- S=主として砂 Sand
- 後期更新世 Late Pleistocene
- Ms=多摩ローム Tama Loam
- Ss=下末吉ローム Shimosueyoshi Loam
- L=末区分ローム Undivided Loam
- D=段丘堆積物 Terrace deposits
- Ka=片瀬層 Katase Formation
- Ki=吉沢層 Kissawa Formation
- W=渡内層 Watauchi Formation
- S=下末吉層 Shimosueyoshi Formation
- 中期更新世 Middle Pleistocene
- N=長沼層 Naganuma Formation
- 第3紀 Tertiary
- 新鮮世 Pliocene
- It=池子層(凝灰岩砂質泥岩互層) Ikego Formation (Alternation of tuff and sandy mudstone)
- Is=池子層(凝灰質砂岩) Ikego Formation(Tuffaceous sandstone)
- Om=大船層 Ofuna Formation
- Nism=野島層 Nojima Formation (凝灰質砂質泥岩) (Tuffaceous and sandy mudstone)
- Uts=浦郷層・Urago Formation・深沢凝灰質粗粒砂岩層 Fukasawa Tuffaceous Sandstone
- 後期中新世 Late Miocene
- 豆子層・三崎層 Zushi Formation・Misaki Formation
- Zalm=砂岩・泥岩互層(泥がち) Alternation of sandstone and mudstone
- Xals=砂岩泥岩互層(砂がち) Alternation of sandstone and mudstone

Fig. 5. 藤沢市および周辺地質図 (三上他 1983)  
 Geological map of Fujisawa City and surrounding areas (Mikami et al 1983)

め相模平野と呼ばれている。

藤沢キャンパス予定地が位置する相模台地は下末吉ローム層が分布しており (Fig. 5)、比較的古いローム層のこの地域にはシラカシの他にスダジイの生育も台地肩部にみられる。また谷部にはタブノキが生育し、イノデータブノキ群集の残存林が茅ヶ崎市側に残存している。引地川周辺を主とした沖積層は、台地を切りこみ現在水田耕作地として利用されている。藤沢キャンパス予定地より東部では多摩ローム層が分布し、よりシラカシ林の分布が多くみられ、スダジイ残存木はほとんどみられない。境川西岸の川名の下末吉ローム層の分布域にヤブコウジースダジイ群集の残存林が調査されている (Tab. 2)。

### 3. 植生概観 Vegetation and landscape

藤沢市北部は南部の平坦な平野部と異なり相模台地の広がる比較的起伏の大きい開発しにくい地域であった。したがって土地利用としては薪炭林として利用されてきた雑木林の管理、スギ、ヒノキ植林による林業、田・畑耕作による農業を主体とし、持続してきた地域でもある。したがって、藤沢市北部には、藤沢市の2つの郷土の自然のうち、現在なお残されている“ふるさと景観”の1つがあると言っても過言ではない。藤沢市はかつて南部の国道1号線 (旧東海道) ぞいに宿場町の一部と漁業による生活があった。相模平野の大部分は湿地であり、砂丘地であった (宮脇・藤原・村上 1984)。現在はそのふるさと景観はすっかり失なわれ都市化されたが、北部の農業地域であった田園景観は幸いにもまだ現在残されている。開発の手からまぬがれたということはまた交通、商業の面で不便であるが、反面自然環境が、固有の文化と日本人のエネルギーの潜在基盤としての形態がそのまま残されている地域でもある。

藤沢キャンパス予定地域は、中でも豊かな黒ボク土を主体としたシラカシ林の残存林、薪炭林として利用されてきたクスギーコナラ群集でまとめられる雑木林が、敷地南部斜面、北部および北東部の半島に残されている。またスギ、ヒノキ植林は敷地に接した西部の谷地斜面、敷地北部斜面および、北東部の半島地形部に残されている。敷地中央部は長い間畑耕作に利用されてきた (Fig. 2) ため、現在耕作放棄された年代により耕作放棄雑草が生育を異にしている (p.60)。谷部の沖積低地は水田として利用されてきたが、現在は放棄されヨシ群落、オギ群落、ミゾソバ群集などの耕作放棄水田雑草群落にかわっている。

街道大庭・獺郷線ぞい、あるいは諸之木線より神明谷戸線に至る途中には、伝統的な農家の屋敷林が残されており、また近代化された一部の建物と、生垣、屋敷の裏の斜面の緑がたくまず調和し、落ちついた地域の文化景観を持続させている。